

---

# ネギま！ ～魂狩り～

桜楼月華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！ ～魂狩り～

### 【Nコード】

N0786Y

### 【作者名】

桜楼月華

### 【あらすじ】

テンプレ的な転生というやつです。ね解ります。はあ、ぼくは男なのに女になっちゃうし、突然女の子……っていうか豹子が降ってくるし……。ていうかこの神様をどうにかしてほしい……。ああもう、儘だ。このまま原作介入してやろうじゃねえか。原作ブレイク。fキャラ崩壊。作者の休み時間に作ったてきとー小説。作者の文才なし。これら全てを許せる人におススメします。

思い通りになるなんて思いたくもありません

ネギま！ 三十五巻。

ぼくが買った漫画一冊。それが周囲に曝け出された。白黒のペー  
ジが血に染まっていく。なんでかなあ。痛みは不思議と無かった。  
それどころか心地が良いとさえ思えた。視界が霞んでいく。音が聞  
こえなくなる。鉄の臭いが消えていく。宙に浮かんでいる様な感覚  
が生まれる。

こうしてぼく、

は死んだ。

心地が良いままに流れていく。川の流れに逆らわず、ただ流れて  
いく。そんな感覚。

そして、それは唐突だった。

「痛っ！」

急に、落ちた様な感覚。それから腹部に衝撃。

肺の中にあつた空気が強制的に排出された。今、ぼくは目を開け  
ているのだろうか。暗い。もしかして、目を開けてないのかもしれない。  
じゃあ、この重い瞼を持ち上げよう。あれ、目の開け方って、  
どうやるんだっけ。

息ができない、けど苦しくない。体中が痛くて、体中が心地良い。  
矛盾だらけだった。

(……なんなんだろうなあ。ぼく、死んだはずなのに)

そう、死んだはずなのだ。ぼくは死んだ。漫画を買ったその日の帰りに、トラックに轢かれて、それで死んだはずだ。ここが病室じやなければ、死んだはずだ。

ええ、確かに貴方は死んだ

……誰だ。

若い女の声。残念だけど、ぼくは一生涯女性となんらかの関係を持ったことが無い。それこそ、先生と生徒。或いはクラスメイトという関係が限界。友達なんていう関係を持った女性は、誰ひとりしていない。

私だって、なにも貴方の様なやつと友達になりたくて来たわけではないのよ？

知ってるよ。答えたいけど言えない。でもどうやらこちらの意思は伝わっているそうだ。それはなにより。しかし、一体なんなのだろうか。地べたに這い蹲ったまま、動けない。いや、ここが地べたかどうかも分からない。

どうも貴方は私の部下のミスで死んじゃったみたいだね。だから貴方にチャンスってわけよ

ベタっすね。

そういうもんよ。世の中なんてベタで埋め尽くされてるわ

否定はしませんよ。たった十九年の命でしたけど。

それにしても、なんだかこの声は心地が良い。脳に直接伝わってくるような、変な感覚だけでも、不思議と心地が良いのだ。現実味

のない声だと思った。

まあ、とりあえずよ。貴方は生き帰る。いえ、生き返るだけね。だって貴方、自分の世界に帰れないもの

どういうことだろうか。ぼくが自分の世界に帰れない？ それなら、ぼくはどんなチャンスが与えられるというのか。

貴方は、私の祖父が創造した世界に送るわ。貴方が持ってた漫画、この世界が基盤なのよ

ここまで言えば、分かるかしら？

ああ、どうせあのネギまの世界に送り込まれるんでしょ。

そう  
物分かりがいい子は好きよ。だけでも貴方は好きになれなさ

なんでまた。

そう  
だって貴方、怖いんですもの。貴方と話していると死んじやい

神様も、死ぬんですね。  
少し意外だ。

当たり前よ。この世には死なないものなんてないの。不老不死の存在だって殺すことくらい安易なものよ

さいですか。とりあえず、なんですか。チャンスって言うなら、特殊な力くらいいくれるんですよね。

そうね。貴方の望み通りにしましょう。できるだけね。

できるだけ、ですか。まあいいです。

それじゃあぼくの魔力値はあのナギ以上。殺気の出し方会得済み。魔法詠唱は勿論できる。あと、何か武器が欲しいですね。ぼくが見たあの世界。武器がなくちゃ、キツイなんてものじゃない。魔法の射手で死んじやいます。

それから《戦いの旋律》 《魔法の射手》 はデフォで扱えるように知識をください。

そう。把握したわ。武器はこちらで決めるわね。

ああ、それから注意事項ね。貴方、女になるから

……すみません、幻聴に邪魔されて聞こえませんでした。もう一度言ってください。

そう。把握したわ。武器はこちらで決めるわね。

ああ、それから注意事項ね。貴方、女になるから

態々全文リピートサンキューです。ですが残念です。また幻聴が聞こえました。

現実逃避は感心しないわよ。仕方ないじゃない。自然とそうなっちゃうのよ。男は女に、女は男に、ね

そんなバカな。

そんなことがあつては堪ったもんじゃない。

断りたい。今すぐ断りたい。断ろう。

もうダメよ。矛盾が無い様に世界を修正させちゃったから

じゃあ元に戻してくださいよ。

あんた私のこと嘗めてる？ どんだけ疲れることさせる気なのよ、あんた。ただでさえ疲れが溜まってぶっ倒れそうなのに

……………すいません。

だが待つてほしい。ぼくが女？ 男なら誰もが夢見るシチュエーションと言えばハーレムだ。

だが、自分が女になるだと？ ふざけないでほしい。それは苦痛だ。日常生活に支障が出る。

別に良いじゃない。女の体で遊んでれば。あんあん言ってなさいよ

あんた神様の癖に下品ですよ。

神様だからって糞も尿も屁も出ないって訳じゃないのよ

知りませんよそんなこと。

もう鬱陶しいわ。私のこと偏見持つて見てる人

あんた有名人なんですか。アイドルなんですかこのヤロー！。

やるつじゃないわ。アマよ

その訂正もどうかと思います。

もついいわ。話ばかりしても面倒なだけ。……バイバイ、

……バイバイ、ぼくの

さあ、ぼくの転生物語。始まり始まり。

思い通りになるなんて思いたくもありません（後書き）

次から本気出す。とでも思ったか！！

これはぼくの完・全・趣・味・小・説だ！

感想で「こんな感じにストーリーを進めてえ」とか言うのも五十パーセントの確率で却下だああ！

タイピングミス・誤字・誤変換なんて日常茶飯事！

……うん、普通に読んでくれると嬉しい。

## 希望は悉く達成困難であるべきだ

目が覚めた。体を動かさず思考を働かせる。無駄に動いて命のピンチなんてご免だ。そんなことあり得ないだろうけど。だけでも念には念を、だ。ここは魔法の世界。なにが起こっても、不思議じゃない。

体に変な違和感を感じるが、周囲はまったくと言って良い程に違和感たるものを感じない。人の気配も全くないし、視線も感じない。半径百メートルまでなら、視線に気づける自信はある。昔から臆病だったから。……ここまで何も感じないと、逆に不安が募る。いつも人ごみのなかで過ごしてきたからね。

さて、と。そんなことはどうでもいい。今は状況把握と行こうか。周囲に違和感がないなら体を起しても大丈夫だろう。上体をゆつくりと持ち上げる。周囲を見渡すが……見事なまでなにもなかった。

「あのヤロー……じゃなかった。あのアマ。一体ぼくをどこに放り落としてくれたんだ？」

見た感じは普通の森。……だが聞こえてくる動物の鳴き声が普通じゃない。

びぎやーとかぶぎやーとか。

時たま聞こえてくる普通の鳥の囀りが少し救いになった。

しかし、ぼくの体。あまりにも違和感の塊すぎる。あるはずのものが無くて、無いはずのものがある。とんでもない違和感。どうも、本来無かった臓器があるというのは不可思議極まりない感覚だった。

「……傑作だな」

まあ、性別がないよりはマシだろう。精神が男で身体は女。……変態爆誕の瞬間なのではないだろうか。いや、だがしかし待て。この世には性転換手術をしている人もいる。ならば不可抗力にこうなったぼくは変態じゃない。あ、いや。性変換手術した人が変態って言いたいわけじゃないんだけど。

そうだ。やましい心なんてものを持つてるから変に思ってしまうんだ。

ここは、前向きに行こう。

まず女の身体ならば、男を落とすくらい容易いのではないだろうか。今の自分のスペックなんて知らないけど。とりあえず、並の女と同等レベルであれば十分だ。男から情報を聞き出すことくらい他愛もないはず。

「だけど、こんな森の中じゃあなあ……」

自分の喉から出てる声とは思えない可愛らしい声に少し動揺してしまう。さっきまで違和感がなかったのに、意識するとかなり変だ。前までの低い声はいずこ。

ま、まあいい。本当は良くなんかないけど、この際どうでもいいとしておこう。

ぼくの視界で捉えることのできる自分のスペックを調べよう。

身長的には小学生から中学生だろうか。比較物がないから分からないけれど、男だった頃の身長との違和感からしてまず間違いない。胸は……ない。いや、微妙に盛ってある感じか。下半身部分の違和感は仕方ないと割り切る他にない。

とにかく、だ。森を出よう。そういえば、魔法発動媒体の杖や指輪は……あ、あった。ぼくの唯一のアクセサリ。シンプルなデザインのブレスレット。確か、ネギまの世界には浮遊術があったはずだ。今のぼくにできるとは思えないが、その内必要となってくるだ

ろう。ならばこそ、誰かに会うべきだ。

この森からしてここは魔法世界だろうか。ならば魔法を知らない人なんていないはずだ。早く森を出て、誰かと接する機会を貰おう。魔法熟練者がぼくに良い。魔法の師匠となる人を探すのだから、当たり前だ。

森を進んでいく。なにもない。見事になにもない。途中通った湖でタコみたいなやつと会ったが……。如何せん大きすぎて、今のぼくには倒せそうにない。故に逃げた。湖から離れば良いだけだったから簡単だった。

そして逃げ切った後で思い出したことがある。

武器だ。

あの神様はぼくに武器を持たせてくれているはず。だが見てみる。今のぼくの持ち物はどっかの学校の制服みたいな服と魔法発動媒体と思われるブレスレットだけ。

「……騙されたのかな」

神様が人を騙すだなんて、あり得ん。

だがこれが一番あり得るというのもまた事実。なんせ神様は死ぬのだ。死ぬものは、騙して騙して騙して生きて長らえようとする。ここから考えられる可能性からすれば、願いを叶えるごとに、神様の寿命が減っていく。疲れが溜まっていると言っていた。それは願いを叶えすぎてもうすぐ死にそうだと言っていたのではないだろうか。或いは、ぼくの願いの中で「武器が欲しい」という願いを叶えることもできずに死んだのか。なら、少し酷いことをしただろうか。と、罪悪感を感じていると、ぼくの頭上になにかがひらりと降ってきた。ぼくは呆然とそれを見る。必然、それはぼくの目の前

の地面に落ちてしまう。

「……………紙？」

紙だった。

しかし、こんなところで紙なんてものが降ってくるなんて、あまりにも不可解だ。なにかの意図があつて落とされたのか、定かではない。だけでも紙を拾ってもなにもバチが当たるわけでもないだろう。

腰を低くして紙を拾う。白紙だった。裏を見る。なんか書かれてた。

やっほー、ぼくちゃん元気ー？ 元気じゃないかそうか。私、あれね。さっきまで一緒に話してた神様。んで、武器ね。すっかり忘れてたわ。めんごめんご。だから、渡すわ。

そうそう。浮気なんてしちゃだめだよ。ほっぺにちゅーまでなら許す！

P S この紙は落ちてから十五秒後に爆発します

ドカアアアン！

読み終わった直後に爆発した。

「けほっ……………」

怨めしいことしてくれるじゃねえか神様。てか神様、なんか口調変わってなかった？ あれか。神様は会話と手紙で性格が変わるタイプの人なのか。或いは現実とネットで人格が変わる人。

てか文の最後はなんだ。浮気？ ホワイ？ ぼくは誰かと付き合っている記憶が一切ない。そもそもこの身体でどんな人と付き合え

というのか。

「……お」

爆発した後の煙が晴れた。そしてぼくの足元になにかがあるのが見えた。

……………。

大剣だった。

「……まじもんに危ないもの送ってきたな、あの神様<sup>ヤロー</sup>」

敢えて口に出していった。あの神様の前では口に出しても出さなくとも同じだろう。

さて、と。これがぼくの武器というわけか。てか神様の寿命はどうした。いや、ぼくの勝手な想像だったことは確かなんだけど……………。貴女に対して心配したぼくが間違えでしたね。すいません。

「ていうか、武器送るよりもぼくを町に転送してほしい……………」

とりあえず大剣を拾った。これがRPGゲームなら今頃BGMが流れてくれるはずだが…………。そんなものが流れるはずなど無く、相も変わらず変な鳴き声が虚しく聞こえるだけだった。

武器も手に入ったことだし、とりあえずはもうちょっと森を練り歩いてみようと思う。

しかしこの大剣重い…………。女の身体になつたから筋力でも低下したのかもしれない。不便だ。早くも日常生活の不安が浮上した。力不足と体力不足。ううむ、どうしたものかな。

森を歩いていたら高い壁がそびえ立っていた。崖だ。崖で行き止

まりになつていたのだ。そんなバカな。まあいい。この崖を目印にしよう。これにそつて歩いたら外に出られるかもしれない。かもしれない運転……いや、かもしれない歩法は大事だよ。もしだめだったら頑張つて崖を登ってみよう。この大剣背負いながらつて無理難題っぽいけど。

一人で森の中を歩くのは意外と寂しい。寂しいなんて感覚、麻痺していたと思つてたけれど……。まあ、とりあえずだ。寂しさを紛らわすために、いろいろ説明をしていきたいと思う。

まず女の身体になつた感想。正直、損しかない。

今のところ得が一つもないのだ。華奢な身体に見合つた体力に筋力。今現在、既に疲れが出始めている。なにより、身体全体がむず痒い。自分の体じゃない体になつたせいなのか定かではないが、とりあえずこの感覚に慣れるにはかなりの時間が必要だろう。あと、髪が凄く鬱陶しい。日光のせいか、茶髪つぱく見える前髪がさつきから邪魔だ。頭にはカチューシャがついてるのだが……。あの神様のことだ。カチューシャを弄つたら爆発、なんていうオチがあるに決まっている。だから触れないことにした。本当なら前髪を掻き上げたい。けど頭が吹っ飛んでゲームオーバー、じゃあ地獄の果てまで逝つてらっしゃいにはなりたくない。

ちなみに今来てる服は制服の冬服的な感じ。そのくせミニスカなのだから、さつきから下がすーすーして仕方ない。

次に大剣の方だ。

大剣というより両手剣と言つべきなのだろうか。ぼくの今の筋力では肩に担いでやつと片手で持てる。つまり支えがないと、片手で持つことは不可能。もしかすると前世のぼくでもこれを片手で持つことは不可能なんじゃないだろうか。柄が普通の剣より長い気もする。

外見は……なんとというかおぞましい。鰐が頭蓋骨と来た。髑髏だ。

なにこれホラー？

そしてその髑髏から伸びる背骨の様な柄。

刃は頭蓋骨の口から出てる感じ。

……ていうかこれネクロマンサーじゃん（知らない人はブレイザードライブで調べてね）。

今更気付くだなんて、ぼくは鈍感だなーあはは。笑えねえ。ぼくの記憶力はどうやら最盛期をとっくの昔に追い越したらしい。

後なにか言うことはあるだろうか。森の感想？ そんなの、今のところ「わぎゃー」だの「ぶぎゃー」だの「にゃあああああああ！」みたいな悲鳴が……。え、悲鳴？

上を見上げた。一度太陽の光で目が眩んだ。しかし良く見てみると、空から人間が落ちてくる。え、嘘。マジ？ ないわ。このままじゃぼく踏みつぶされ

「……あう！！！」

踏みつぶされましたね。クリーンヒットです。わたわたと焦った所為もあってか、今ぼく背中をふまれてる状態です。つまるところぼくはうつ伏せに倒れて、降ってきた人はそこに座ってる感じ。

「……」  
「……」

暫しの沈黙。うう、早く退いてもらいたい。正直苦しい云々の前に痛い。

「……あの、退いてもらえませんか？」  
「……」

上の人からの返事は無い。なんで……。

不審に思っ、首を頑張っ、て捻っ、て上の人を見る。

外見的特徴は……なんていうか、あれだね。フエイト一味の一人、良く環と一緒にいるあの獣耳の子。名前は……なんだっけ？ 忘れちゃった。豹みたいなのに変身してたし、豹子（仮）と呼ばう。

ていうか吃驚だよ。いきなり原作キャラに踏みつぶされたっ、て言うのか、ぼくは。一つ言っ、て良いかい？ 不幸だ。

「……あの、退いてもらえませんか？」

さっきよりも大きな声で言っ、た。

けれどやっ、ぱり豹子（仮）からの返事は無い。

「……………」

ていうか、気絶してた。

座ったまま、目を回して気絶してた。

気絶していると分かれれば容赦はいらな。い。デフォで使い方知っ、てる魔法、《戦いの旋律》で肉体強化。

今思えばさっきエンカウントしたデカダコ。魔法の射手で倒せば良かったのではないだろうか。だけど試したこともない魔法を実戦で使うというのはどうなのだろう。

そんな今更なことを考えながら豹子（仮）を無理矢理、ぼくの上から退かす。退かした際の衝撃で豹子は倒れてしま。う。とりあえず、崖のところに寄り掛かるように置いといた。

「やっ、と……。これ、どうしよう」

豹子のことを見ながら考える。

取り敢えず、何故か顔が泥だらけだ。拭いてあげないと。ポケットの中にハンカチがないか、探してみる。

くしゃ。

なんか紙みたいなのがあった。

やっほー。本日二回目の手紙だよ。その大剣がなんなのか正体は分かったよね？ さ、答えて？ 答えないと後三秒後に爆は

「ネクロマンサー」

ギリギリで答えた。

どういう仕掛けか、手紙に書かれている文字が追加されていた。

良くできましたー。ぱちぱちー。あ、今のぱちぱちって言うのは焚火の音じゃないからね

知らねえ。

そのネクロマンサー。実はミスティッカーなんだよね。だからその剣、ステッカーにしたりできるんだ。便利でしょ、褒めて褒めてー。

あんたの性格の変わりようを褒めてやりたいよ。

でね？

堂々とスルーしてんじゃねえ。

そこに置いてあるネクロマンサー、ステッカーに戻しといったから。

そういえば、確かにネクロマンサーがない。どこに行ってしまったのだからかと首を巡らす。

あ、そうだ。ミスティッカーは自分の身体に貼って力を出現させる。なら、この袖のところか。

制服の袖をめくる。あれ、無い。

もう一度手紙を見る。すると、横に「ステッカーは貴女のきゅーていな胸に貼つといたよん」と書いてあった。一言だけ言わせてください。しね。

ぼくは男だ。身体は女でも男なのだ。そんなぼくに胸にあるステッカーを剥がせというか。どんなエロゲーでもこんな展開ねえよ。だが背に腹はかえられん。ここには今誰もいないではないか。変態だと思われることは、無い。

決心して制服をたくし上げる。なんとなく天空を仰ぎながら、貼ってあるはずのステッカーを探す。……ああ、空が綺麗だ。

……おい神様。ふにふにした感触意外、胸に何もねえぞ。

手紙を見た。しかしさつきと内容は変わら……ん？

の下に、もう一つ。凄く小さい文字でなにかが書かれている。

嘘びよん 騙された騙されたーきゃはは。さつき貴女が確認した腕の反対側の腕に貼ってあるわよ。

ぼくは手紙をその場に思いっ切り叩きつけた。

なんなんだあのクソ神様<sup>ヤロ</sup>。ぼくで遊んで楽しいのか。楽しいかそうか。

さて、と。今度こそ、腕にミスティッカーがあるかどうか確認。オーケイ。今度こそ貼ってある。

確認し終わると、手紙が突然光り出した。なんとなく手紙を拾ってみた。

なにやら新たな文が書かれていた。

PS この手紙は貴女が触れてから一分後に爆は ドガア  
アアアアン！

「……………けほっ」

本日二回目の爆発頂きました、しね。

というかぼくはぼくで学習しろよ。あの神様がこれまでになにをしてきたか分かっているのに……………。ああもう。なんだか無性に苛々してきた。

……………おや、手紙を持っていた手に何かを持っている感触。

「……………へえ、あの神様も、なかなかに粋な計らいをしてくれるもんだね」

そこには真つ白なハンカチがあった。

……………バツとハンカチを広げ、裏表を確認する。

……………オーケイ。なにも書かれてない。よし、とりあえずこの豹子を背負おう。川がある場所まで、歩くしかない。

数分歩いた先に水の音が聞こえてきた。

また数分歩いていると、やっと森から抜け出せた。崖から落ちてきて、水飛沫を上げている。つまり、滝。なるほど、森から抜け出せたわけではないのか。まあ、そんなご都合主義ないもんね。

「なかなかの絶景かな」

前世でこの様な場所に来たことのないぼくは暫しその光景を堪能していた。だけでもいつまでも見物というわけにもいかない。さっきまで手紙だったハンカチを水に浸す。ちゃぽちゃぽと一、三回濯ぎ、ぎゅーつと絞る。

それから木に寄り掛からせた豹子の顔を拭いてあげる。女の子がいつまでも泥だらけの顔と言っわけにはいかないでしょ。

「にゃっ……」

ぴくん、と反応した。水が冷たすぎただろうか。そんなことを考えながら豹子を拭いていると、豹子の目が開いた。

「……っ！ 誰！」

「人に疑問を投じるときは疑問符を使おうね」

突然、誰って叫ばれても困る。聞くときには聞くときなりのイントネーションと言うものがあるでしょ。ああいうの、意外と大事だよ。

「わ、私を無視するな！ 貴様は誰だと聞いているんです！」

「それに、空から落ちてきてぼくの上に乗ってきたのは君のほうだよ。言わばぼくは君の命の恩人だ。そんな命の恩人に対して『貴様』とか言うのは感心しないよ。豹子ちゃん」

「ひよ、豹子……？」

あ、しまった。ぼくとしたことが。

ぼくとこの子は初対面　という設定　だ。なのに半人半獣だと気付くなんておかしい。

「なんでもないよ。で、君の名前は教えてくれないのかな」

「わ、私は………」

「ん？ 聞こえないよ。もっとちゃんと行ってほしいかな」

「こ、暦です………」

「ああ、暦ちゃんか………」

あー、そうだ。暦ちゃん、そうだったそうだった。時間操作系のアーティファクトだから「暦」って名前なんだよね。

「少し大人しくしててね」

「んにゃ」

顔に付着している泥がまだ取れない。乾いてしまっているのか、簡単に取れそうにない。

仕方がないからもう一度川でハンカチを洗う。ばしゃばしゃと。

「フェイト様………」

後ろで暦ちゃんの声が聞こえた。フェイト……。

後ろを振り向いた。

原作キャラ。ネギの敵。完全なる世界の実質的ナンバーワン。テ

ルティウム。別名フェイト・アーウェルンクス。  
フェイトが、無表情に無感情に、ぼくを見ていた。

「……曆ちゃんみたいな可愛い子に様付けで呼ばれてるなんて、少し羨ましいな」

「君、何者だい？ 人間じゃなければ魔族でもない……。本当に、何者なんだい」

……え？

人間じゃなければ魔族でもないだって？ そんなバカな。そんな事実、ぼくは知らない。

ポケットに手を突っ込んだ。

くしゃつと音がした。その手紙を引っ張り出し、読んだ。

やつほー。本日三回目の（以下省略。さてさて、君は今、死神としてそこにいるんだよん。魔族でもなければ人間でもない存在ってね。あ、でも大丈夫。性感帯の感度は高い方に設定してあるから。ちゃんと自慰行為とかでき

くしゃつと丸めて、ぼいっとぼくの背後にある川に捨てた。

直後、ぼくの背後からチュドーン！ と言う爆発音がした。

「  
……」  
「  
……」  
「  
……」

三者沈黙。

なんか、さっきの爆発音的に威力上がってない？ ちくしょう。幻聴で神様の「ちっ」とかいう舌打ちが聞こえてきた。

「あー、なんていうか。少しやり直そうか。で、なんだっけ？ ぼくが何者かって？」

「うん。君は本当に分からない。謎だらけだ」

お、空気読んでやり直しに付き合ってくれた。意外とフェイトは良い人なのかもしれない。

……単にぼくが何者なのかを知りたいだけなんだろうけど。

「君にぼくが何者かなんて知る必要性は木っ端微塵もありやしないよ。まあでも、敢えて言うならしがない《魂狩り》ってところかな」  
「……………良い魔力を持つてるね」

唐突に、フェイトは話題を変えた。

「……………どうだい？ ぼく達と一緒に来ないかい？ 《完全なる世界》に」

《完全なる世界》か。ロマンスだと思うよ。世界を救う、なんて。

だけどフェイト。君にはそういうの似合わないと思うよ。

「《完全なる世界》がどういうものなのかは知らない。けれど、世界を救うみたいなのは正義感、ぼくにはないんだ。ごめんね」

「……………そうかい、少し残念だ」

それにしても、ここでやっと比較対象ができた。

……ぼくの身長は小学五年生か六年生くらいかな。高学年であることには間違いないね。フェイトよりちょっとだけ高いだけだし。

「けれど、少しだけならついていっても良いよ。ぼくにとって君達の存在はとても好都合だ」

「……利用したいって言うのかい？」

「利用されて、利用して。それが社会の基準であり基本だよ」

高校で習ったことと言えばそれくらいだ。

利用したければ利用されるってね。

ざっざっざっざっざっざ、と歩いていく。フェイトは平然としてるけど、曆ちゃんは完全に警戒してるね。

平然としている方の人を無視。警戒してるとも怯えているとも言える姿の曆ちゃんの前に立つ。

「にゃ、にゃにをやる気ですか！」

「少し大人しくしててよ。目に入っちゃおうよ？」

「にゃうう……」

泥を拭っていく。折角の可愛い顔が泥で台無し、なんていうのはこの世で最も許せないことだよ。

さて、やっと泥が取れた。

振り返り、フェイトの方を見る。すぐそこにフェイトの顔があった。

「……顔近い」

「ごめん。だけど、ぼくは君に興味が出てきた。さっきの言葉からして、《完全なる世界》に来てくれるのかな」

「うん、そう言ったはずだよ。君達を利用するってね」

フェイトはにやりと笑った。目が笑ってるフェイトを、ぼくは始

めて見た。

フェイトはぼくから距離を少しだけ取って、右手を差し出した。

「歓迎するよ、魂狩り」

その右手を、右手で掴んだ。

「……よろしく、人形」

こうしてぼくは初っ端から敵と利用して利用される立場になってしまった。……これも、神様の狙った通りのストーリーなのだろうか。少し気になった。

ポケットに手を突っ込んだ。

くしゃっ。

「……………」

ポケットの中には、一枚のミスティックカードがあった。『虐殺する者』<sup>イド</sup>。『虐殺する』<sup>ジェノサ</sup>

～フェイトSide～

曆を迎えに行って、彼女にあって、またここに帰ってきた。墓守

人の宮殿。ぼくは自室とも言える部屋にこもって考えていた。  
謎だった。彼女、「魂狩り」と名乗った彼女はあまりにも不思議  
だった。

「魂狩り……………」

どういふことなのだろう。魂を狩るとでも言うのか。それではま  
るで死神。

コンコンと。ノックをする音が聞こえた。

「…………フェイト、少し相談があるんだ。入って良いかな？」

彼女だった。謎だらけの彼女。

「入って良いよ」

許可を出すと、躊躇いがちに部屋の扉が開かれた。

茶髪に頭の頂点にある小さなアホ毛。蒼いカチューシャ。やる気  
のなさそうな目。それでも良く整った顔。触れれば消えてしまいそ  
うなほどに細い輪郭。

何故か、学校の指定服の様な服。

「それで、なんだい？」

できるだけ動揺を隠して言った。なにに動揺したのかは…………あま  
り言いたくない。少しだけ言うなら、ちらりと見えた太腿に、だ。  
…………少しどころか暴露だね、これじゃ。

「少し旅行に行きたいんだ。どうにかしてくれないかな」

「……旅行に？」

旅行つて……なんでまた……？

「さっき言ったはずだよ。利用して利用されて……。つまりこれがぼくの目的だよ」

一人称が「ぼく」とは、あまり優雅なものじゃないな。ぼくには関係のないことだけれど。

「ふう、ん。そういうこと。……一つ条件がある」

「……なにかな」

「名前を、教えてくれないかな」

ぼくはまだ彼女の名前を知らない。「魂狩り」が本当の名前とは考えづらい。

「ぼくの名前……。なんだったかな」

「覚えてないのかい？」

これは正直驚いた。名前を覚えてないだなんて……。さすがに演技じゃないのか、と疑った。

「まあ、適当に今考えるよ」

「それって偽名……」

「なんか言った？」

「いや、なんでもない」

何故か微妙な殺気が流れた。本当になんで……？

「まあ、本当に適当で良いんだけどね。……黒木愛華を名乗るよ」「……そうか。それじゃあ愛華。まずはここから出してあげないとね。浮遊術もできないなんて、未だ信じられないけど」「うん。ありがとう、フェイト」

……初めて彼女の微笑みを見た気がする。

悪くは無いか。こんな感情。

感情？ ……このぼくが感情だって？ ふざけている……。人形のぼくが感情なんて持つはずなのに。

希望は悉く達成困難であるべきだ（後書き）

今回から本気出し過ぎて話しが飛躍しすぎた。

誤字脱字とかはデフォだ。指摘なんかすんな。あ、いや。やっぱり指摘してくださいお願いします。

まあ、まずは麻帆良に行くこと優先にした。その結果がこれだエイサオラエイサー！だったはずんだけど最初に魔法世界で名を売ろうと思うんだエイサオラエイサー！

## 生きてければ生きればいい(前書き)

1。最早サブタイと内容がまるで関係ない。だがそれがぼくクオリティ

## 生きてければ生きればいい

フェイトに外に出してもらい、旅行用のバッグを背負う。フェイトが十日分の食料やお金を渡してくれた。困ったら戻ってくればいい、とのこと。あの子、本当は優しいんじゃないか？

まあ、そんなことはどうでもいい。原作とフェイトのイメージの差異なんてどうでもいいのだ。

今するべきこと。それは魔法世界で少しでも名を知れ渡らせることだ。

さっきフェイトに言った『黒木愛華』という名前を売り出していく。

そんなわけで、フェイトに貰った魔法世界の地図を頼りに歩く。外は既に暗くなり始めていた。

\* \* \*

がやがやと、騒がしい人の声が聞こえてきた。前方を見れば、そこには町がある。いつの間にこんなところまで来ていたのだろうか。一日くらいの野宿は覚悟していたのだけれど……なんだか拍子抜けだ。まあ、野宿をしないで済むというのならそいつは重畳。宿でも探すことにしよう。

\* \* \*

正直に言おう。一日目の町は最悪だった。

治安が悪すぎる。十歩歩く度に爆発音が聞こえるくらいに。

はあ……不幸だと思う。

とりあえず、誰かに情報を聞こう。宿の場所くらいなら知ってる人もいるだろうし。

「あの、すみません」

適当な人に声を掛ける。

「あ？」

振り向いたのは酷くゴツイ男だった。心の中でだけ思った。

「うわ最悪、と。」

「なんか用か？」

「あの、こちら辺に宿ってありませんか？」

「なんだ、旅行者か？」

「はい、そうなんです。一日目で、ここに辿りついて……」

「そうか。ならついてきな。俺も泊ってる宿があるんだ」

なんだ、意外と良い人じゃないか。

ざっざっざ、と歩く。町は本当に治安が悪そうだ。店の中からは瓶が割れる音が聞こえてくる。家の中からは女性の叫び声が耳を劈く。こんな治安が悪ければ、恐らく環境も良くないだろう。アスファルトすらない。西部劇に出てきそうな町だった。しかし、人外の者も多い。さすが魔法世界。亜人というものを本当に目にする事ができるなんて、思いもしなかったし思いたくもなかった。

というか、視線がやけに突き刺さる。なんでだろう。やっぱりこの服は珍しいのだろうか。

数分、彼の後ろをついて歩いていると、彼が突然立ち止った。

「きやう」

当然、唐突に立ち止まられてもこちらは急ブレーキなんてできない。必然的に彼の背中にぶつかった。透かさず謝罪をし、彼の目の前にある建物を見た。

「……ここは？」

「ついてこい」

「はあ……」

返事とも溜息ともとれる相槌で片づけざるを得ない。なんだろう。とても嫌な予感がしてくる。ひしひしと背中によじ登ってくるように。ぎしぎしと、身体が軋む程に、嫌な予感がした。

\* \* \*

彼が中に入っただけだった建物に入る。そこは、なんていうか……想像してた通りの光景だった。

酒をラツパ飲みしてる亜人達。腕試しと称し腕相撲をしている筋肉だるま。ただ静かにワインを飲んでいるローブを着た人達。

「あの、ここは……？」

訊かずにはいらなかった。

治安が悪いから、予想はしていた。だけど、酒場に泊れなど……。

「この二階が宿泊施設になっているんだ。

……マスター！ 客を一人、連れてきた」

「ごつい男はマスターと呼んだ男のところまで歩いて行ってしまおう。追うべきなのだろうか。マスターは紳士的な笑みを浮かべ、ぼくに微笑みかけてくれた。「どうも」とだけ頭を下げて、男が座ったカウンター席に、同じように腰掛けることにした。

「女の子とは珍しいね。ここは危険だから、早めに出ていった方がいいよ」

「そんなの、見てれば解ります。言われずとも明日の朝には出ていきますよ」

「おやおや、無愛想な女の子だ」

爆発的に放っておいてほしい。それでもぼくは男なのだ。

「精神は肉体に影響される、と聞くが……。これまでにどんなものからも影響を受けてこなかったぼくが、今更自分の体ごとときに影響されるはずもない。恐らくぼくはずっとこのまま一生涯、無愛想な女の子というイメージで突っ走るようになるだろう。」

「おいなんだよ、随分と可愛い子がいるじゃねえか、え？ おいアイン、お前いつからロリコンに目覚めた？」

一人、なんだか騒がしいのが来た。

傷だらけのバンダナをしている細身の男。顔を赤くしてることがからアルコールが入ってることが分かる。

どつやらこの常連らしい。そしてこのゴツ男はアインという名前らしい。ちなみにロリコンに目覚めたらしい。ないわ。

「……俺は客を連れてきただけだ」

「ケツ！ 相変わらず連れねえ野郎だな。おい仔猫ちゃん！ どうだ、一緒に飲まねえか!？」

……予想はしていた。こう、なんていうか。突っ掛かってくる人くらいは、いると思っていた。だけど、身体の密着度が酷い。アルコールの刺激臭からして酒を飲んでいたのだろう。嫌に相手の体温が高い。

「おいおい、あんまり怖がらせるなよ……。それと、未成年の飲酒は、ここでは御法度だぞ」

「ハハツ！ あんたも相変わらず固いねえ」

未成年の飲酒が法律的にダメなのは魔法世界も一緒なのか。まあ、当たり前か。身体に悪いもんね。特に今のぼくは女の子だ。精々大事にしたい。

「それより嬢ちゃん、あんた名前はなんて言うんだい？」

唐突にマスターが言った。

「名前……ですか？」

「ああそうだ。あんたにも名前くらいあんだろ？ ここに泊る奴は例外なくサインすることになってんのさ」

「……そうですか」

ホテルと同じようなものだろうか。まあ、そりゃそうか。

「ほら、名前」

「……黒木です」

「クロキ……珍しい名前だね」

マスターはぼくの名前を、ペンで書いていく。

「クロキか！ 女の子にや似合わん名前だなあ！ どうせなら俺様が名前をつけてやるうか？」

「いえ……良いです」というか放っておいてほしい。

「やっぱ仔猫みたいだからな！ みいちゃんとかどうだ！？ 可愛いだろ！」

話を聞け。

まさかさっきの嫌な予感ってこれ？ だとしたら嫌だな。結構シリアスなの期待してたから。

とりあえず立ち上がり、マスターに部屋の番号が書かれた鍵を貰い二階を目指そうとした。

「お、なんだよみいちゃん」

「誰がみいちゃんですか」

「じゃあクロキちゃん」

「……………」

某お笑い芸人三人組で構成されたサーカス団の中の一人を思い出した。

「クロキと呼んでください」

「ちえ、なんだよつまんねーなあ。ってか、もう部屋行くのか？」

「はい。明日は朝早くここを出るつもりなので」

「そっか。まあ、なんだ。この町から出るには少し大変だから、気をつけるよ」

ぼつが悪そうに後ろ髪をぽりぽりと掻きながら言った。どういふことだろう。町から出るのは大変？ 詳しく話を聞きたい。

「じゃ、俺もそろそろ部屋に戻っかな。じゃ、マスター。今日のお金置いていくぞ」

「おう、さっさと寝る寝る」

あ、待つ。

「ぐあっ……あ……？」

変な。

感覚が。くらくら。

頭が。五感が。鈍る。

視界が。ちかちか。

思考が、できなくて。

ばたん、と。ぼくは倒れた。

\* \* \*

〜ツルギSide〜

「ぐあつ……あ……？」

後ろから変な声が聞こえた。その後、ばたんと何かが倒れる音。何事かとふりかえった。

「……お、おい。クロキ？」

クロキが倒れていた。

「おいおい、どうしたんだ急に……そんなところで寝たら風邪ひくぞ」  
マスター。そんな暢気なこと言ってる場合じゃねえよ。

とりあえずクロキの身体を抱き起こす。顔をのぞき見ると、頬が僅かに赤く染まっていた。

体温が妙に熱い。風邪か？

「……お前のアルコールで酔ったんだろ」

「……おいおい。匂い嗅いだだけで酔うか、普通？」

だが確かに、風邪をひいたにしては息も穏やかだ。  
ってことはなんだ？ マジで酔ってんのか？

「とりあえず上着だけでも脱がしたらどうだ。熱いだろうからな」

マスターに言われ、とりあえず脱がす。セーターを脱がした後に  
出てきた服はワイシャツ。これは……。

「……こんな小さい子が着るにしては珍しい服だな」  
「あ、ああ。そうだな」

旧世界は日本……日本特有の、学生服。学生であることは分かるが、身長的なコイツはまだ小学生……。いや、これくらいなら中学生の可能性もあるか。なんでそんな奴がこんな辺境の地に……。旧世界の住人がここに居ることそれ自体が珍しいことだというのに。この世界にもアリアドネーだかなんだかの学校指定服の着用がルールとなってる学校があるが……。まあ、ここにいる奴等はワイシヤツと言えればれっきとした社会人が着る物というイメージだ。珍しいと思っても仕方がない。

「おいアイン。手伝ってくれよ」

「運ぶのくらい、ツルギ……。お前一人で十分だろ」

相変わらず毅然とした態度で酒を頼張るアイン。自分が連れてきた客を他の客に任せるだとう？ まあ、コイツ自身もこの客な訳なんだがな……。

なんとかクロキを部屋に入れた。鍵はこいつが持ってたしな。

ベッドに寝かせてから布団を掛ける。もそもぞと身体を動かし、寝がえりを打った。本当に酔ってるだけなのか？

まあ、それは明日になれば分かることだろう。

「ふあああ……」

酷く眠い。どうやら、酒を飲み過ぎたらしい。俺は早々にその場を後にし、自分の部屋に戻っていった。

\* \* \*

くクロキSideく

「う、……うう？」

ちゅんちゅんと聞こえてくる小鳥の囀りが目覚ましとなった。

いつの間に寝ていたのだろう。上体を起こす。ここは……部屋？

だが残念。ぼくはこんな部屋に入った記憶は無い。もしかして酒場で眠ってしまったのだろうか。ダメだ。思い出せない。というか、頭がくらくらする……。

そういえば、入浴はどうするべきだろう。排便排尿は別に大丈夫だろ。座ってすれば良いということくらいぼくも知ってる。だが入浴は……。ダメだ、不可抗力にでも自分の体を見ってしまう。自分の身体を見て興奮するとは思えないが、だがそれでもやっぱり男としてどうかと思う。主に社会的な意味で。

「……でもなんかアルコール臭い」

そればかり気になる。これはかなり重大な問題だ。ぼくは酒を飲んだことがない、と言えば嘘になる。一度だけ興味本心で飲んでみたことがあったのだ。だが一口飲んだ後の記憶が一切ない。ただ、思考ができないという感覚を残して……。

……ああ、もしかしてぼく、酔ってたのか？

でも酒を飲んだ記憶は一切ない。ただあの細身の男に話を聞こうとして……。

その時、こんこんという音が聞こえた。

「おい、起きてるか？ 起きてるなら開けてくれ」

「……今開けます」

聞いたことがある様な無い様な……。なんだか曖昧な声だった。誰だろう、と警戒しながら部屋のドアを開ける。

「……………」

「よっ、どうやら酔いは収まったようだな」

「残念ながら未だに頭がくらくらしみます」

「ハハハ、そうかそうか。にしてもお前弱いなあ。少し臭いを嗅いだけで気絶しちまうなんてよ」

……………。

ああ、なんとなく把握した。ぼくは酒の臭いを嗅いただけで酔って気絶したのか。

そして思い出した。この人は昨日の騒がしい人だ。そういえば名前聞いてなかった。

「あの、貴方の名前は」

「それより、お前に客だぜ」

「……………客、ですか？」

果て、ぼくはこの世界に来てからまだ一日も経っていない。ぼくの知り合いと言えば……………フェイト？

「今行きますよ」

「おう、店の外で待ってるから早く行ってやれ。あんな可愛い子を待たせるなよ」

可愛い子？

フェイトが？ 確かに、男性としては可愛い方かもしれないが…

……。まあ、いい。とりあえず行くこう。

着替えは無いからこのままだね。

マスターに洗面台を借りて顔を洗う。

……眼は覚めた。そういえば、ネクロマンサーは原作通りの性能なのだろうか。魂だけを斬り、喰らう大剣。まあ、どうせその内神様が教えてくれるだろ。ネクロマンサーの詳細が分かるまで無駄に戦闘とかはしない方が良さだろう。いや、戦闘をしないで済むならそれが一番いい。まあ、あの神様のことだ。どうせぼくを巻き込む方向に進むように世界を改変するのだろうけれど。

そんなことを考えて気が滅入った。とりあえず、後でポケットの中身を見よう。今は見ない方が良さ。今見たら店の中で手紙が爆発することになるから。

「残念ながららくお待たせしましたクロキです」

「あ、えっと……愛華さん！」

「……ん？」

えっと……この黒い髪のショートカットでまだ幼い感じの子は……確か曆ちゃん、だよな。ダメだな。最近記憶力が本当に無くなってきた。酒のせいかな。

「なんで私の了解なく旅行なんかに行っちゃうんですかー！」

ええ。なに。まさかあの墓守人の宮殿から出るには曆ちゃん了解が必要だったのか。それは迂闊だった。もしかして原作にも書いてあったかな？ ううーん……。

「と、とにかく戻ってきてください！ まだなにもお話してないじゃないですかー！」

「そんなこと言われても……」

ぼりぼりと後頭部を掻く。

こんなとき、どうすればいいのかぼくは知らない。こんなことなら前世でももつと幼稚園児くらいの子とかと遊んでおくんだ。最も、そんなことは今更すぎることなのだけれど。

「お話なんて、どこでもできるでしょ。ほら、中に入って  
「え？」

「ほら、いいからいいから」

「じゃあああ!？」

半分強制、半分無理矢理に曆ちゃんの手を引っ張って店の中に入れた。

酒場に入った瞬間にまた注目された。どうやら夜通しずっと飲んでいたらしく、昨晚までのメンバーと変わっていなかった。いや、ぼくの記憶力なんて死てにならないけど。

とりあえず、とカウンター席に座る。マスターに水を二杯頼んだ。水は無料だから、幾つでも頼める。

それから朝ごはんになる簡単なものを作ってくれと頼んだ。

「それで、曆ちゃん。ぼくになにかお話があったのかな」

「ふえ……。う、ううん……」

……考えてなかったのか。

しかし曆ちゃんが腕を組んで「ううんううん」と悩んでる姿は可愛らしい。少し眼福。当分眺めていようと思う。異論や議論、反論は認めないし異議も一切認めない。

「ほらよ、朝ごはん」

そう言っけて置かれたのが納豆だった。キレても良い？

「……………」

「あれ、なんだ。反応悪いな。あはは、まあこれは軽い冗談だ。ツルギの奴がお前は旧世界の日本人だっけて言っけてたから、日本らしい物を用意してみただが……………」

いや、確かに納豆と言えば日本特有の『日本人でも苦手な人が多い食べ物』のだけど……………。まあぼくは納豆が好きな方だ。だから致し方なしと納豆が入っけてる茶碗を手に取っけて。ていうか、ツルギっけて…………。誰。そしてなんでぼくが日本人だと知っけている。

「なんだ、食うのか？ それだけじゃあ腹減るだろ。ツナ喰うか？」

いろいろおかしいだろと突っ込みたい。

ツナと納豆の組み合わせっけておいしいのかい？ 残念ながらぼくは試っけてたことが無い。

ぼくは危険な綱渡りはしない主義だ。だからツナは断っけてた。とりあえずお茶碗の中の納豆を、何故か用意されてた箸でかき混ぜる。

「…………。愛華さんは旧世界出身なんですか？」

ぼくが納豆をかき混ぜてるのを不思議そうに見ながら、曆ちゃんは訊いてきた。納豆の事を訊けばいいのに。

「…………。どうなんだろうね。精神的に旧世界は島国日本出身なんだっけて、身体的には魔法世界出身なんだよね」

マスターが「なんだそりゃ」とか言ってるけど気にしない。  
事実だ。変えようもない現実。あの神様の所為で作られたどうし  
よもない真実なのだ。

「てかなんだよクロキ。アイカって可愛い名前があるんじゃないか  
いか」

「……クロキって呼んでくれると嬉しいかな……。自分で名乗って  
おいてアレだけど、少し恥ずかしんだ、その名前」

「そりゃ勿体ねえつてもんだぜ、嬢ちゃん」

だからぼくは男……。まあいいか。こんなこと言っても頭がイカ  
したと言われてお終いか、主に社会的に抹殺される可能性が高い。

「日本と言うのはどういうところなんですか？」

「……良い国、とは言えなくなってるね。昔は誇れるものがあつた  
けど、今の日本は腐れ切ってる。少なくともぼくがいた時代は、政  
治家も民度も経済も、最悪だった」

「そうなんですか……」

「まあ、唯一誇れる所と言えば、歴史かな。その歴史も、某国に盗  
まれそうなんだけど」

「愛華さんの国の歴史を盗もうと考えるなんて許せませんその国を  
教えてください」

「韓……いや待て、何をやる気だ」

「潰してきます」

「やめときなさい。そういうことしちゃダメだよ。めっ」

子供を叱る様に言ってみただけど、自分が言っているとするとこれキ  
モいな。「めっ！」が許されるのは母性に溢れた女性だけというこ  
とか。

それからはなにがどう流れたのか、「愛華さんが持つ力はどんな力なんですか」とか聞かれた。なんで聞いてきたのか正直分からない。この子の前でなにが魔法を使用したわけでもないし、ましてやネクロマンサーは見せていないはずだ。

「だってフェイト様が気に入ったんですよ？ なにか特殊な力とか、凄い思想の持ち主とか、戦争孤児とかじゃないと、フェイト様あなたのこと拾ってません」

ふむ。なるほど。

「実はぼく、死神なんだ」

なにかしらの力というのではないが事実を言ってみた。ていうか死神なんて種族、この世界にはあるのだろうか。

「頭が良い馬鹿ってというのはこういうことを言うのでしょうか」

なんだろう。今さり気無く馬鹿にされた。

「はあ……。実問題、ぼくも分からないんだ。フェイトがぼくのどこに興味を湧いたのか。さっぱりなんだ」

これも事実だ。

フェイトには死神だということを書いてない。ていうか、死神ってどういふ種族なのよ。

「そうですか……」

何故か落ち込んでいる様子。

……本当なんで落ち込んでるの。

「強いて力を言うのなら、これかな」

そう言ってワイシャツの袖を捲る。

腕に貼られた一枚のミスティッカー。

「なんですか、それ？」

「ミスティッカー。術者の精神力を使用して出現させる武器だね。精神力って言うのは、この世界だと魔力だったかな」

確かそうだったはずだ。だから魔力を失うことは精神力を失うということに等しい、らしい。

「それが愛華さんの……？」

「そう。恐らく切り札だね。と言ってもジョーカーというわけでもないよ？ カードが少ないからね、今は。とりあえず、魂喰らう魔剣と覚えておくといいよ」

納豆を混ぜ終えた。

十分ねばねばになったと思う。

糸を引いてる納豆を思いつ切り頬張る。

「おいおい、なんだよそりゃあ。《魂喰らう魔剣》たあ随分と物騒だな。……というか、もうちょっと綺麗に喰えよ」

「ぼくも、正直びっくりですよ。こんな剣、ぼくの手に残りに余って零れ落ちてしまいます。……納豆を勝手に持ってきたの貴方ですよ。なら、食べ方はぼくの勝手です」

「なんですか、その理屈。子供っぽいであつっ！」

なんかまた馬鹿にされそうだったから曆ちゃんの頭を軽く叩いていた。

さて、と。今日の朝にこの町を出る予定だったんだけど……曆ちゃんが着たおかげで予定が伸びた。ちなみに曆ちゃんはなにやらぼくと話して満足してしまつたらしく、フェイトの所に帰つていった。なんだつたんだろう。

すっかり太陽は真上によつてしまつた。

「それじゃあツルギさん、アインさん、マスター。お世話になりました」

「……………」

「……………」

「……………」

え、なんで無言？

あまりにも空気が重すぎるんだけど。

「……………クロキ」

この重い空気の中、アインさんがやつと口を開いた。

「ここを出ていくのは良い。だが、出ていく際には気をつける。誰かに見つかるのは好ましくないぞ」

「はあ……………そうですか」

良く分からないヒントを貰つた。本当に良く分からない。

なんなのだろう。町を出ていく際には気をつけるって……………。

……………この時に気付くべきだったかもしれない。アインは、必要以上のことを喋らない。つまり、これは超重要なことだった、という

「よし」。

\* \* \*

Side Out

「クロキ、大丈夫かね」

「大丈夫じゃない。さっきから町の喧騒がどっかに消えた。恐らく

……」

「早速って感じだな」

ツルギとアインはカウンター席に座って、マスターはコップを拭く。

重い沈黙が続いていた。いつもなら客でいっぱいだろうはずの店  
はがらりとしていて、三人以外誰ひとりとしていない。

「……どうする」

「どうするもなにも、なあツルギ」

「とりあえず、《観戦》くらいはしようぜ。さすがにあいつらも女の子相手に殺そうだなんてしねえだろうからよ」

そうしてツルギは立ちあがり店の出口へと向かう。それにつられる様にアインも立ちあがり、歩き始める。マスターは拭いていたコップを置いてから、二人を同じように歩きだす。

運命の歯車はぎしぎしと嫌な音を立てて  
軋む。

狂い踊る。

まるで一つの歯車が壊れた様に、狂い回り、

全てはこれから

《魂狩り》  
ネクロマンサー

《『魂喰』クロキ》

《『虐殺する者』》  
シエノサイド

《『黒の断罪者』》  
ブラックジャックジメント

物語は紡がれる。

握るは大剣。

巡るは輪廻。

狂うは運命。

生きてければ生きればいい(後書き)

最後の文とか厨二病丸出しやないか。

まあ、ぼくの趣味だから気にしないで。

ちなみにこれあれね、原作開始十年前くらい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0786y/>

---

ネギま！ ～魂狩り～

2011年11月1日02時26分発行